

郷土研通信



エゾカンゾウ
アイヌ語名（屈斜路地域）
ーフレ・アパッポ

発行：てしかが郷土研究会 北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10
発行者：松橋 秀和

六月例会

六月二六日に開催されました。出席者は、会員九名、ゲスト三名

〇例会議題

一、近況報告

六月一六日にフィールドワークを行いました。

・辻谷守氏蔵書見学

保存場所は、大道開発（有）社内にある氏の書斎、大型の倉庫、大型コンテナ三棟、自宅内の四力所を氏のご厚意により拝見させていただきました。ほかにも熊牛原野にある倉庫にも保管している、とのことでした。

文学・歴史関係の貴重本を中心に推定数量は約四万冊がありそうです。

・町内チャシ跡見学

弟子屈町教育委員会社会教育課片岡学芸員の案内で、ウランコウシチャシ、クツシャロシバ第一チャシ、同第二チャシ、プライクニチャシの四力所を見学しました。いずれのチャシも草むらの中にあり、道案内と現地説明がなければその所在には気がつくことはないでしょう。

この場所に「チャシ」を設けた理由を考える貴重な体験をすることができました。

種市資料移動に伴う本棚制作

総会で承認された、「種市佐改資料の移設に伴う本棚制作」については、試作品の本棚を作成したので、改良点などのアイデアをいただきたい。

教育委員会から資料の一部にコンパネ、角材の提供がありました。

二、令和6年度の予算書・再提出

予算書・再提出

前回の例会で諮った六年度の予算案に対して、特別会計を設けては如何か、との提案があったことから、八〇万円を特別会計に振り向け、歳入歳出総額五二万四二五一一円を本年度の予算

としました。

三、情報提供

〇ふるさと歴史館の事業計画

令和六年度の事業計画が提示されました。ふるさと歴史館に関する予算が一七万円です。

例会で報告はしませんでした。ふるさと歴史館専任の学芸員が六月で退職しました。現在新たな学芸員を八月一日採用で公募している、とのこと。

〇えこまち推進協議会の事業計画

当会が構成団体に汲み込まれていますので、六月二二日に総会が開催され出席しました。

勉強会

「松浦武四郎さんのコタン滞在記

現代の武四郎さんとイソリツカラの心友も尾語りを添えて」（最終回）

講師：斎藤敬子さん

一月から始まった斎藤さんの五回目の講義で、予定の講義項目の終盤に差し掛かりました。

講義の中で、「テシカガ」の町名の語源が「岩盤の上」となっているが、「テシ」とは本来「築（やな）」の意味であり、いずれの日にか、この築の意を地名解に加えようだろうか、との提案がなされた。会員からは「ぞうだよなあ…」との声も聞かれました。

また、松浦武四郎の蝦夷地探検は、単に地理や地名、風俗、産物を調べるだけでなく、アイヌの人々も国

- 1) 現代の松浦武四郎さんって、どんな人？
～おそらく性格もそっくり!?～
- 2) 「久摺日誌」だけでは、わからないこと
～イソリツカラという人名はどこに?～
- 3) 「久摺日誌」から、わかること
～3日間も滞在してくれたので～
- 4) 武四郎さんに教わったこと
～テシカガという地名は「岩盤の上」で良いのか!?…などなど～
- 5) 後世へ伝えたいこと
～屈斜路湖畔で刻まれてきたアイヌの生き様～



釧路市立博物館講演会
「三重県松阪市出身の探検家・松浦武四郎と釧路」
とき：七月九日（火）十八時～
会場：釧路市立博物館講堂
講師：松浦武四郎記念館
館長 山本命 氏
特別ゲスト：三重県松阪市
市長 竹上真人 氏
聴講：申込不要・無料
（斎藤さん提供）

情報提供

まなもと歴史館

（摩周観光文化センター）

令和六年七月二四日（水）
一九：〇〇から

次回の例会

の民の数ではないか、と虐げられていたアイヌ民族の窮状を幕府に訴えることをし、その煽りで記録文書の出版を禁止されるなどの処分を受けたことを話された。

屈斜路湖中島に関する論文

斎藤さんの講義から会員のが過去に屈斜路湖の中島を調査したときのエピソードに派生していきましました。
日本火山学会に「北海道屈斜路カルデラ中島火山の噴火史」という論文があり、中島自体は径2.5km、高さ175m。中央部に大きな火口が

むかしむか史写真館

No.343



あり、径1.5km、深さ60mなどの詳細なデータが紹介されています。
（浦山さん提供）



屈斜路湖の中島-美幌峠から

弟子屈橋から下流の釧路川の河道が現在の形になったのは、大正九年の大洪水の後である。写真は、釧路川旧河道の対岸から撮影した札木久八が営む札木大工の家と細工場で、『弟子屈町商工の歩み』に依れば、札木久八は、明治一八年に標茶の釧路集治監を建設す

るために来道し、釧路集治監が完成したのち硫黄山の硫黄搬出のための挽車づくりをした、とある。明治二十年代、弟子屈に市街地が形成され始めてきたが、これらの家を建てたのが札木久八の札木大工で、写真の場所に住宅と細工場を設けて定住したのは明治二九年頃といわれている。
この少し下流に本山旅館の敷地内に温泉のマークがある。『弟子屈町史』に「…本町に温泉のあることを知り、明治



『弟子屈町商工の歩み』から大正2年頃の弟子屈市街図

鹿が群れをなして、この辺の泥を食っている」との記述があり、松浦武四郎が見た温泉ではないかと思われる。
（筆責 松橋）

「むかしむか史写真館」について

「てしかが歴史写真館」は、平成三〇年一二月にNo.212（「むかしむか史シリーズ」ではNo.38）を最後に平成三一年一月号で連載終了の告知で終刊となった。新たに「むかしむか史写真館」と改題して復刊し、「むかしむか史シリーズ」の連番を振った。

一六年に狩猟を兼ねて夏だけ住まう温泉宿をつくった」とあるが、これが松浦武四郎の『久留日記』に「（現摩周駅付近の宿泊地：筆者注）川の西岸に渡つて二、三町も上がった、川の岸に温泉があった。